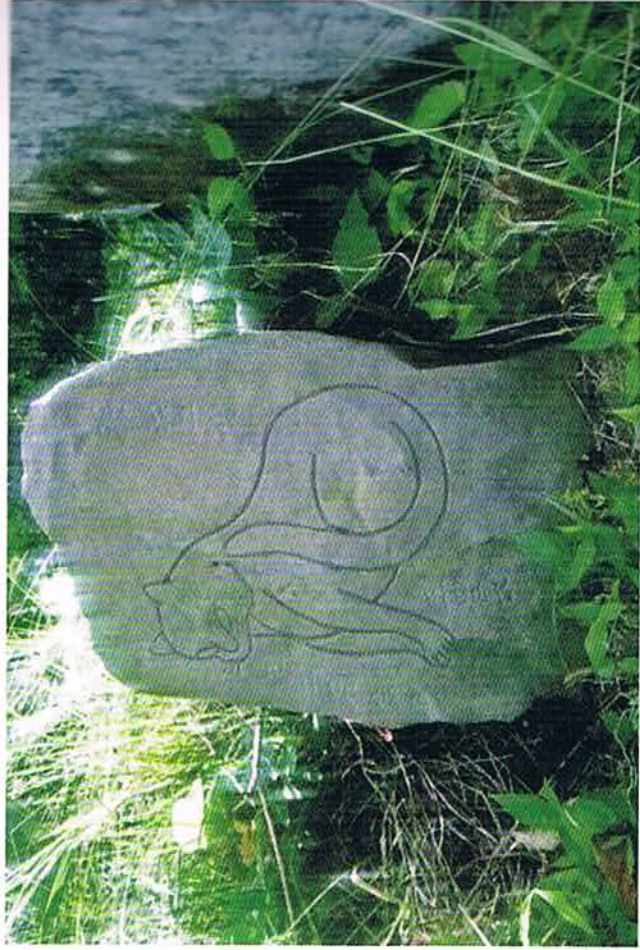


郷土 あたり

第 121 号
平成三十一年四月発行



小山農村公園内の猫神碑

亙理郷土史研究会

第121号 目次

仙台坂・仙台堀などにその名を残す 江戸時代の仙台屋敷のその後	月田秀吾	1
山元町の文化財 政宗下賜の茶室を再建へ	山元いつ茶組 清水ますみ	18
我が町内会 『森房』名の由来考察	菊地義昭	22
わたりの散歩道①	鈴木光範	30
亘理東街道雑感	鈴木仁	38
編集後記		52

表紙写真

小山農村公園内の猫神碑

祖先の残した碑が、神社・寺院・道端等に見られますが、注目せず
に通り過ぎることが多いようです。
なぜ猫が神様か、詳しく本文にて。
なお、碑の猫の形をわかりやすいように多少修正してあります。

仙台坂・仙台堀などにその名を残す

江戸時代の仙台屋敷のその後

総面積は六〜七カ所で三十町歩の広さ

月田秀吾

筆者が若く職を得て東京で働いていた頃、都内のあちこちで仙台坂とか仙台堀など仙台になんだ名前を眼にすることが多かった。後日調べてみるとやはり伊達家・仙台藩とゆかりがあることがわかってきた。それ以来注意してみると何カ所かの屋敷跡なども見つかった。

特に上屋敷だった汐留の屋敷が東京都埋蔵文化財センターの手でくわしく調査されているので、江戸時代の仙台屋敷はどうだったのかをまとめてみた。

江戸藩邸のその後

六十二万石の大藩「伊達家」は江戸に六カ所もの屋敷を構えていた。時代によつては七〜八カ所だった時代もあり、その広さも八万七千四百坪、約三十町歩に達する。上屋敷は江戸城近く、現在のJR新橋駅近くにあり、時代によつては若干入れ替えが行われたようだが、その中の一つ、最後まで上屋敷として使用された別名「浜屋敷」は二十年程前「汐留地区再開発」のため、東京都埋蔵文化財センター等の手によつて発掘調査が行われたのでその主な内容も含めて説明してみよう。

山元町の文化財

政宗下賜の茶室を再建へ

清 水 ますみ

(山元いっ茶組)

亘理城は、戊辰戦争に敗れた仙台藩最後の十三代藩主・伊達慶邦が、刀を外し白袢姿で降伏式に臨んだ場所。奇しくも昨年は、戊辰戦争後百五十年。改めて仙台藩、亘理伊達の幕末に思いをはせた人は多い。ところで、側近の奉行として、伊達慶邦と戊辰の苦難を共にした大條孫三郎道徳(伊達宗亮、明治五年・慶邦の本姓復命により改称)という人物がいる。お隣の山元町は坂元の「藁首城(坂元要害)」(現、山元町坂元字館下一一九の二・本丸に坂元神社、二の丸に坂元小学校)の最後の城主である。そして彼は、ここに取り上げる三の丸に現存する茶室(山元町文化財)に関わる主要人物であり、茶室を愛した。

ところで、茶室は宗亮が坂元に建てた訳ではない。藁首城城主は代々、仙台の大條家の上屋敷に詰めており、坂元の茶室の物語は、戊辰以前、仙台藩伊達家の歴史を更に遡る。

この茶室について、建築の専門家達が「藩祖政宗以来歴代藩主に重んじられた仙台藩における茶の湯文化・歴史の流れを伝える茶室として文化的価値は非常に高い」「仙台藩の茶室として残る唯一」として、震災後特に老朽化が進み放置されている現況を救えと、声を上げた。それを受けて地元町民の会、ゆかりの茶室に光をあてるつちやGO「山元いっ茶組」が作られた(二〇一六年)。山元町で二回の勉強会を経て、昨年は坂元おもたか館と仙台メディアア

テークで計二回の講演会を開催し、歴史的意義と保存・活用の重要性を訴えた。多くの聴衆を集め、亘理からも多くの方が参加した。役場は「山元町指定文化財茶室等整備・活用検討委員会(二〇一八年夏)を設置した。しかし、緒についたばかり。

ご講演いただいた大條家二十世当代、伊達宗行氏(現仙台藩志会会長)の講演資料から、茶室の古く興味深い来歴の物語をご紹介します。

まず、「伊達政宗が豊臣秀吉から拝領」「青葉城に移築」したとの言い伝えがある。拝領はいつどこか？ 秀吉の朝鮮出兵(文禄の役)に功あつた政宗は、文禄二年に伏見に邸宅を得る。岡千因「仙台志料」には、秀吉が天守閣下に四つの茶室を作り、自分、家康、利家、政宗で分けたことや、政宗の茶席で加藤清正が熱い茶をがぶ飲みしたエピソードが紹介されている。茶室拝領は、この時期以外にはないとみる。因みに大條宗直(七代)もこの時期、政宗と全く行動を共にしていることも明記しておきたい。その後の秀吉の死と一六〇〇年関ヶ原の戦い。政宗はこの年の暮に青葉城の建立を開始するから、茶室の青

葉城移築は、豊臣勢が伏見城を引き上げる前後から、青葉城大広間完成の一六一〇年までの間の可能性が高いと推察する。更に検証を待つ必要があるものの「秀吉拝領・青葉城移築」の言い伝えは、茶室の価値を示す重要要因だと専門家も評価する。

大條家に茶室が下賜される

下つて天保三年二月、この由緒ある茶室が仙台北内の大條家上屋敷(現在の地下鉄国際センター駅周辺)に建つ。十六代大條道直は、その功績に対し当時の十二代藩主伊達斉邦から褒美の希望を聞かれ「是非ともあの茶室を」と申し入れた。入料付(移設費用公費)での下賜であった。功績とは、伊達家跡継ぎ問題解決である。十一代伊達斉義の早逝で跡継ぎ問題が浮上、時の老中水野忠邦が徳川将軍の庶子を送り込もうとした時、幕府にあらがえない仙台藩メンメンを抑え、敢然と水野に詰め寄り談判。登米伊達から斉邦を迎えて十二代とし、伊達家の血を守つたのである。伊達家の歴史に重大な事件であつた。川内の道直の茶室には、石州流茶道家元、菊田伊州や



茶室 (2016年夏撮影)

東東洋などの画家達、回文の仙代庵など、そうそうたる文人達が集い、彼らの作品・足跡が多数、今も大條家に残る。

やがて幕末、明治へ。伊達宗亮(大條孫三郎)は、川内の屋敷を、軍による強制買上げで手放すも、茶室は新しく得た支倉の敷地に移築する。尤も、伊達家にも、「ご一家」大條家としても、由緒深い茶室を軍下の川内に放置する訳にはいかない。慶邦の扁額も戴く。屋敷を「翠雨山房」、茶室を「此君亭」(仙台風俗志)より)と呼び、道直にも劣らぬいくしみて様々な文化活動の場とし、詩を吟じ、書画を描き、文人としての才をいかに発揮する第二の人生を暮す。義首城の最後の城主として、坂元との付き合いも怠らなかつた。宗亮の多くの作品が山元町歴史民俗資料館に保存されている。

そして、昭和七年、宗亮没後八年。茶室は、仙台の支倉から宗亮の直接の臣下達が住む大條家のゆかりの土地、坂元の義首城三の丸に移築された。「土台の石も一緒に運び、専門の大工さんが建てた」「常磐線も使つて運んだ」と地元で言う。道直が茶



「大條家ゆかりの茶室」フォーラム (2018年6月)

室を拝領して一〇〇年の年だった。そしてさらに一世紀弱を経、老朽を極めて今に至ることになる。

おもだか館での講演で、元仙台博物館長・佐藤憲一氏が「元通りに建て直して眺めるだけでは又朽ちるだけ。暮らしの中に生かして使いながら保存していくことが重要」と訴えられた。茶室の歴史物語を振り返るに、まさしく！茶室は大條道直、伊達宗亮(大條孫三郎道徳)が言わば文化サロンとしてイキキと活用して来た。

